

恋の空蟬

長唄 全詞章

作詞者・作曲者不詳

本文の題名「恋のうつせみ」

恨めしと思ふも君が愛しさの余りて我は身を焦がす

〔フシ〕 沢辺の螢草隠れ、有るとは見えて幻のみだれ心ぞ浅ましき

〔ヲトシ〕 過ぎにしことを思ひだし言ふても言ふても外心

あだな恋路が得手物で、くどき落すが御自慢か

〔ハル〕 あの性悪な男めと、胸ぐら取りて引立てる、其の不勢おそろしや

おかしやんせ何ぞいの

〔上ノギン〕 よふも大事のすけなりさんを、おまへの殿御にやわしやどこまでも、

ああならぬぞへ

〔一中節〕 未来をかけて神かけて言ふておいたはお忘れか

〔上〕 わしや忘れはせぬものを、さりとては

〔上〕 おまへの肌のこのやや愛し殿御と二人の中に雌松姫松幾千代かけて羨まし、我は恨めし

恋しき人に

面差しの、にようたにようた花あやめ、いたいけ盛り手をひきつれてねんねんころころ

ののさまいくつ、ならなんなん、情の下に住む、それき、これき真実うやつらやつらや

〔ヲトシセメ〕 なほも逆立つ其の有様、二道かくる徒し男を、連れゆかん小棲かいとり、

しやんなしやんなしやんな、後ろ影

見るにするとき乱れ髪、堅い車の片思ひ、ただあぢきなき世の中や、語るも涙なりけらし